

図書館展示 6月●2004

FRANZ SCHUBERT 1797-1828

# 若いシューベルト の イタリアニズム

企画●藤本一子(本学講師・音楽研究所所員)



期間●6月7日-7月2日  
場所●図書館ブラウジングルーム

# 若いシューベルトのイタリアニズム

Franz Schubert 1797-1828

名作歌曲(野バラ)や(ます)の晴れやかな旋律は、シューベルトの魅力を支える柱でしょう。当時のウィーンはイタリア音楽の伝統が強く脈打っていました。20歳の(イタリア風序曲)は、そうした伝統のうえで、さらに新しいイタリア音楽への反応が結集した作品です。若いシューベルトの音楽に息づく“イタリア的なもの”に耳を傾け、その魅力を探ってみましょう。

オーストリアの音楽はドイツとは違って、やわらかな響きにみたまはれています。とりわけ若い時期のシューベルトの音楽は、美しいカンタービレの旋律があふれています。じつはウィーンではバロック以来、イタリア音楽が重要な位置をしめていました。代々の皇帝がイタリア音楽を好んだことから、宮廷音楽の主要なポストはほとんどイタリア人作曲家でした。なかでもオペラはイタリアものが愛好され、専用の劇場が設定されていたほどです(ケルントナートーア劇場)。宮廷礼拝堂も宮廷楽長の管理下にありましたから、すなわち、教会音楽においてもイタリアの伝統的な書法が重んぜられていました。少年～青年時代のフランツ・シューベルトは宮廷楽長アントーニョ・サリエーリに少なくとも5年間、作曲を学ぶのですが、その学習もこうした背景のもとで意味づけられるでしょう。サリエーリは当代随一のイタリア・オペラの作曲家だったからです。

ところで、サリエーリ学習が一段落したころ(これについては後述します)、ウィーンに新しいイタリア音楽の波がおこります。ジャコモ・ロッシーニ(1792-1868)のオペラがウィーンのケルントナートーア劇場で上演されたのです。その軽快でエネルギッシュな音楽は、たちまち、ウィーン中を興奮のつばに投げ込みました。時代はナポレオン戦争が終わり、オーストリア(カトリック)・プロイセン(プロテスタント)・ロシア(ロシア正教)が、教派をこえた統一キリスト教的なヨーロッパを実現しようと動き出したころでした。秩序あるよき市民社会を維持するために、新聞・雑誌はもとより、講演や音楽会のプログラムにいたるまでが、検閲局の監視下におかれ、社会にはどこか閉塞感が漂っていたといわれます。もともとイタリア音楽の伝統があったウィーンでしたが、なにか鬱積した空気が流れていたところに、モダンなロッシーニのオペラが新しいイタリア音楽の火をつけたのでした。若いシューベルトの明るくしなやかで、しかもキレのよい音楽はこうして、伝統と新しさと、ふたつの意味においてイタリアの音楽から影響をうけて作曲されたのです。

## Contents

若いシューベルト / 2	コンヴィクト / 3	コンヴィクトの友人 / 6	作曲の教師 / 7	ウィーンの劇場 / 8	シューベルトの歌曲を広めた歌手たち / 8	シューベルトのイタリア音楽の学習とこの時期の作品 / 10	国立音楽大学附属図書館所蔵「19世紀に出版されたシューベルトの印刷楽譜」 / 13	参考文献 / 13-14	シューベルト参考年譜 / 15-17
--------------	------------	---------------	-----------	-------------	-----------------------	-------------------------------	---	--------------	--------------------

## 若いシューベルト

### 正装した17歳のシューベルト

ヨゼフ・アーベル作(?)油彩 1814年。1989年に初公開された肖像画。1814年(17歳)にリヒテンタール教会とアウグスティン教会で(ミサ曲第1番へ長調)を指揮して大成功をおさめ、父からピアノをプレゼントされた頃に描かれたとみられる。アウグスティン教会での上演には、サリエーリも列席し、その演奏は新聞でも賞賛された。晴れやかなデビューである。この肖像画は1989年にリータ・シュテープリンによってはじめて公開された。その後、この人物がシューベルトかどうか疑問であるとの声も出されたが、これに答えるべく、1997年に徹底的に科学的な検証が行われ、現在では真正のシューベルト画像であると認定されている。

### 若いシューベルト

友人で画家のモーリツ・シュヴィントが描いたシューベルト。シューベルトとは1821年頃(シューベルト24歳頃)に知り合ったとされるが、この画をみるところ、もう少し前から交友があったのだろう。

### カール教会前の遊歩道

ヤーコブ・アルト作 彩色版画 1820年頃。ナポレオン軍によって破壊された街は修復され、ウィーンに平穏が訪れた。音楽は市民階層の娯楽となり、散歩する子供たちも楽器に興じている。しかし制圧のもとの平穏さゆえに、若者たちのエネルギーは内向していった。シューベルトを囲む「シューベルティアード」はひとつの燃焼の方法だったのかも知れない。この絵の正面に見えるカール教会左の建物に、一時、シューベルトと友人シュヴィントが住んでいた。

### ウィーン市内から郊外リヒテンタールとロスアウをのぞむ

シューベルトが生まれ育った土地は、オーストリアのウィーン郊外北西部のヒンメルプフォルトグルント地区である。当時ウィーン市内は城壁で囲まれており、12の門によって外部と通じていた。門をぬけると、緑が一带に広がっており、フォアシュタット[郊外]と呼ばれていた。ヒンメルプフォルトグルントはそのひとつである。シューベルトの父、フランツ・テオドールはこの地区で当局から許可をえて、私塾のような学校経営を行っていた。この貧しい学校長は、息子たちも教師になることを望んだが、できるだけよい教育機関で学ばせ、よりよいポストに就職させたいと願ったのであろう。こうしてフランツ・シューベルトは地区の教会のオルガニストであるミハエル・ホルツァーにオルガンを、父と兄にヴァイオリンやピアノを習いながら、エリート教育機関であるギムナジウムに入るべく受験準備をする。

## コンヴィクト

シューベルトはいつ、どのような音楽教育を受けたのでしょうか。「この少年は最初から手の中に音楽をもっている」と教師を驚嘆させたシューベルトでしたが、彼の音楽書法はどのような環境のもとで培われたのでしょうか。

1808年5月に「宮廷礼拝堂少年ソプラノ歌手」の募集広告が「ウィーン新聞」に出されました。シューベルトはこれに応募し、みごと合格して、奨学生として「コンヴィクト」と呼ばれる全寮制の教育機関に入りました。「コンヴィクト」（“共に生活する”の意味）は、ギムナジウム、あるいはウィーン大学に通う学生たちが一緒に寄宿生活を行う“寮”でしたが、学校での学習以外にもさまざまな教育が行われていました。それにしても、声がよくて音楽の才能があったとはいえ、郊外の貧しい学校教師の息子がこのギムナジウムに入学することは、難しかったはずで、最近、発見された資料をもとに、このあたりの事情をご紹介します。（参考文献：Eva Badura-Skoda; Schuberts Konviktszeit, seine Schulfreunde und Schulbekanntschaften）

新しく発見された資料は、1800/1801 1822/23年の生徒名・年齢・出身地、生徒の成績、1775 - 1821年の帝室王室諸機関の資料、それに、ギムナジウムの教育プラン、校則などに関するもので、現在は、ウィーンのベートーヴェン・プラッツのアカデミッシェ・ギムナジウム倉庫に保管されています。新資料によれば、シューベルトは1808年以前に、つまりはやくも1806年（7歳）に、19名の少年とともに宮廷礼拝堂歌手の試験を受けています。さらにこれより2年前にサリエーリに紹介されていたという研究もあるほどですが、いずれにしても1806年の試験で、宮廷楽長サリエーリは9名を宮廷礼拝堂の少年歌手として選抜し、シューベルトも入っていました（展示パネル参照：表の6番目にメゾソプラノとしてシューベルトの名前がみられます）。ところが、例えばギースリーゲル Giesriegel という少年はすぐに宮廷礼拝堂のミサに加えられたのですが、シューベルトは採用されませんでした。報告者エーヴァ・バドゥーラ＝スコダによれば、シューベルトは能力と年齢の両方の点で、コンヴィクトに入るには若すぎるとみなされたようです。つまり、「コンヴィクト」は大学に進学するためのギムナジウムに属するものであり、ギムナジウム入学の最低年齢は10歳だったからです。翌1807年には、宮廷礼拝堂歌手の募集はありませんでした。奨学生になるためには、歌手として採用されなくてはならず、結局、1808年5月に「ウィーン新聞」募集広告が出されたのを待って、シューベルトは応募したのでした。

「ギムナジウム」の試験は、「読み・書き（ゴチック書体・ラテン語書体で書く）・計算」以外に、ラテン語文法の基礎知識が必要でした。シューベルトは最初の試験のあと、1806年から1808年まで、おそらくサリエーリにすすめられて、父や兄や、教会オルガニストであるホルツァーに音楽を学び、ラテン語の予備勉強も行ったと考えられます。ラテン語の教本は、Comenius; Kurze Einleitung zur lateinischen Sprache ets.zum Gebrauch der österreichischen Schulen というもので、シューベルトの父もブリュンのギムナジウムで同じ本で授業を受けています。こうして1808年にシューベルトは、「読み・書き・計算」を含む採用試験に「最上」の成績で合格しました。

シューベルトが入学したこの教育機関は、1773年イエズス会解散後に「アカデミッシェ・ギムナジウム」と呼ばれるようになった学校です。啓蒙主義それに、ピアニスト会神父グラティアン・マルクスの精神で運営され、未来のキリスト者、よき市民を育てることを旨としていました。生徒は学問だけでなく、カトリックの精神においても磨かれねばならず、このために数多くの宗教の授業が行われました。毎週2度ミサに参加するなどの、宗教実践も取り入れられていました。

これまで私たちに情報を与えてくれたのは、ドイツ編の「シューベルト・ドクメンテ記録集」でした。じつはこの本にはコンヴィクトの一年目の記録はほとんど記載がありませんが、新資料によれば、のちにシューベルトと関係をもつようになる生徒についてさまざまな記述がみられます。たとえば、1807/1808年の下級クラスには後に友人となるショーバーが入ってきますが、まもなく彼は自由な生活態度のゆえに、ここを去ってクレムスミュンスターのベネディクト会ギムナジウムに移ったことがわかります。

さて、コンヴィクトには、公式には100名、実際は130名ほどの生徒・学生が生活しており、最下級生は一部屋に12名が一緒に寝起きし、夜は一人の召使が番をしていました。シューベルトがここに登録したのは1808年11月3日、最後の学年は1813年でした。入学年の下級クラスは98名、次のゼメスタでは75名に減少。しだいに課題要求が高くなっていくために、1810/11年次には53または54名、1812/13年のクラスでは43名となります。なお、礼拝堂聖歌隊の少年歌手の成績は、宮廷楽長サリエーリに報告されました。さまざまな点で、“宮廷”とつながっていたことがわかります。シューベルトは、「卓抜なる音楽の才能を有するがゆえに」「特に入念に」教育を行うようにとの通達が出されていました(1810年校長ラング宛の書面)。

ところで「コンヴィクト」は、音楽教育にも力を注いでいました。これは「よき市民」を育成するための一般教養にとどまりませんでした。1813年の状況でみると、生徒のうち10名が宮廷礼拝堂の聖歌隊歌手として歌い、さらに別の8名が「宮廷附属」の教会で歌うことを義務づけられていましたから、かれらのためにも音楽実践の配慮が不可欠だったわけです。(以下、エルンスト・ヒルマー著「シューベルト」をも参照)

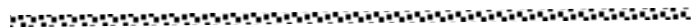
宮廷礼拝堂でどのようなミサ曲が歌われていたかは、多くの公文書が1929年の火災で焼失した現在、厳密に把握することはできません。それでもアルブレヒツベルガー(1736-1809)、ヨーフ・アイブラー(1765-1846)、ヨーゼフ・ハイドン(1732-1809)、ミハエル・ハイドン(1737-1806)、モーツァルト(1756-1791)といったオーストリアの作曲家のほかに、ヨーハン・アドルフ・ハッセ(1699-1783)や、ヨーハン・ゴットリーブ・ナウマン(1741-1801)、アントーニョ・サリエーリ(1750-1825)など、イタリアのナポリ派の伝統をくむ作曲家の作品が演奏されていたことは明らかです。サリエーリは、厳密に言えば礼拝堂付属作曲家ではありませんでしたが、宮廷楽長でしたから、彼のミサ曲とくに初期のものが頻繁に演奏されました。その演奏譜は現在も残っています。

コンヴィクトでは夜になると必ず、学生オーケストラの練習が行われました。ここではハイドンやモーツァルトの交響曲がよく演奏され、シューベルトは実践を通してこれらの音楽に接していました。

しかしシューベルトにとって最大の幸福は、宮廷楽長サリエーリが音楽統括者であったことにつきますでしょう。コンヴィクト生は、基本的には外出禁止でしたが、シューベルトは

作曲レッスンをうけるために、許されてサリエーリの自宅に通っていました。おそらくこれまで伝えられている以上に、シューベルトはサリエーリから多くのことを学び、作曲の基盤として、ナポリ派の書法を身につけたことと思われます。このことは今後、サリエーリとシューベルトの様式研究を通して、明らかにされていくことでしょう。

さて、シューベルトがコンヴィクト時代に学んだことのうちで、もうひとつ、重要なことを紹介しておきます。それはコンヴィクトでは、ラテン語の文芸書で修辞学の書でもあった『雄弁術綱要』が教科書として用いられており、シューベルトはここから多くの刺激をえたということです。クロプシュトック、マティッソン、クラウディウス、ヘルティといった詩人に出会ったのは、この書物においてでした。シューベルトが歌曲を作曲する際に、文学的に高い水準で詩を選択していることが注目されるようになりましたが、その下地もまた、コンヴィクトで培われたのでした。



#### 帝室王室シュタット・コンヴィクト

「よき市民を育成する」との理念に基づき、1802年に皇帝フランツにより設置された皇帝直属の全寮制の学校。厳しい試験に合格した10歳以上の少年が、ここで生活しながら隣接のギムナジウムとウィーン大学に通った。少年ソプラノ歌手は、ギムナジウムで教育をうけ、日曜日には宮廷礼拝堂のミサで歌った。

#### 1806年(9歳)宮廷礼拝堂歌手の入学試験成績表

シューベルトは1808年(11歳)に「宮廷礼拝堂ソプラノ歌手」の試験をうけて合格するが、じつはその2年前の1806年にも試験をうけていた。この表はそのときの成績表。評価は宮廷楽長サリエーリによる。表6番目にシューベルトの名前がみえるように音楽は合格したが、ギムナジウムに不適切とされたため、1808年に再度試験をうけて採用された。

#### 宮廷礼拝堂少年合唱隊員の制服を着たシューベルト(?)

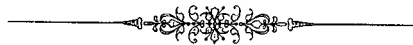
レオ・ディエト作 水彩画 製作年不明。おそらくシューベルトとされている水彩画。宮廷礼拝堂ではこの制服で歌った。

#### 宮廷礼拝堂

ヨーハン・ヒエローニムス・レッシェンコール作の版画1792年。皇帝レーポルト2世のための「テ・デウム」を演奏しているところ。シューベルトは1808年から1813年まで毎日曜日、聖歌隊の少年歌手として、この礼拝堂でミサ曲を歌った。ここではミハエル・ハイドンのミサ曲のほか、ナポリ楽派の薫陶をうけた作曲家フィリップ・ナウマンのミサ曲もよく演奏されていた。19世紀の大作作曲家で、教会音楽をこれほどの密度で実践していた人物は珍しいのではないだろうか。

1808/09 年(11 歳)のときのラテン語文法クラスの名簿  
1809/10 年(12 歳)のときのラテン語文法クラスの名簿  
「姓名・年齢・出身地」が記された名簿。 がシューベルト。

コンヴィクトに入学した年度(1808/09 年)の宮廷礼拝堂少年合唱団員の成績表  
宮廷礼拝堂で歌っていた少年歌手の成績は、コンヴィクトの校長ラングによって記録され、宮廷楽長サリエーリに報告された。 がシューベルト。右端のコメント欄に“特別の音楽的な才能あり”とある。



## コンヴィクトの友人

一生のほとんどを家族から離れて生活し、結婚することもなかったシューベルトにとって、友人は愛と慰めの源泉でした。その意味で、友人は家族であったといってもよいでしょう。彼らはさらに、シューベルトの音楽を理解し、生活の場を提供してくれました。その意味では、芸術の支援者の役割も果たしました。ベートーヴェンに対して裕福な貴族が行ったことと本質的に同じことを、シューベルトの友人たちは行ったというわけです。シューベルトの人生と音楽は、友人の存在なくして語ることはできません。



### フランツ・フォン・ショーバー(1796-1882)

レオポルト・クーペルヴィーザー作の油彩画。彼はコンヴィクトの先輩で、ウィーンのギムナジウムやウィーン大学でも学んだ博識の詩人。シューベルトは 18 歳の年にシュパウンに紹介されてショーバーと知り合う。シューベルトの音楽に共感し、作曲家として進むよう勧めたのはショーバーだったといわれる。シューベルトは彼の家に寄宿し、23 歳から 25 歳の頃には、ショーバーの叔父が所有するアッツェンブルックの城に友人たちが集まっていた。歌曲(音楽に寄せて)はショーバーの詩である。1828 年にショーバーはウィーンのリトグラフ工房を所有し、ここからシューベルトの多くの歌曲を出版させたが、シューベルトの死後まもなくこれを閉めている。

### ヨーゼフ・フォン・シュパウン(1788-1865)

クーペルヴィーザーによる油彩画(現在は消失)に基づくライター作の模写。シュパウンは 1805 年に「シュタット・コンヴィクト」に入学。3 年後に入ってきたシューベルトと親しく

なり、シューベルトの生涯に不可欠の存在となった。コンヴィクトのオーケストラでは第二ヴァイオリンを弾いていた。シューベルトに五線紙を調達したり、何度もオペラにつれて行って、シューベルトに多大な刺激を与えたことも報告されている。歌曲〈若者と死〉D545はシュパウンの詩による。

## 作曲の教師

ウィーンの宮廷楽長アントーニョ・サリエーリ(1750-1825)

イタリアのレニャーゴ出身。1767年にガスマンに見出されてウィーンに連れてこられ、薫陶をうけて教会音楽家、オペラ作曲家として活躍。40以上のオペラを作曲し、当代随一のイタリア・オペラの作曲家として名をはせた。1788年から1824年まで36年間、ウィーンの宮廷楽長の職にあったが、宮廷劇場も監督下におき、1813年からは「楽友教会声楽学校」の校長もつとめるなどウィーン音楽界に君臨した。ベートーヴェン、シューベルト、フンメル、リスト、アンナ・ミルダー＝ハウプトマン、カロリーネ・ウンガー、ヨーゼフ・ヴァイグルなどの作曲家や歌手約60名に、イタリア声楽曲の作曲や歌唱法を無償で教え、歌唱教本もあらわしている。シューベルトは1804年(7歳)の年にサリエーリに紹介され、少なくとも1812年から1816年まで隔週、自宅にレッスンに通っていた。

サリエーリがイタリア語しか理解せず、シューベルトがドイツ語の詩に作曲することを好ましく思っていなかったと伝えられているが、そうではないだろう。シューベルトはイタリア語歌曲を学習する際に、平行して、そのメスマのつけかたをシラーの詩で応用している。この詩を与えたのはサリエーリだとみられるからである。それにサリエーリ自身、シラーの詩に作曲している。ゲーテの詩に作曲した初期の名作はすべてサリエーリ学習時代に生まれていることも忘れてはならない。

シューベルトはサリエーリを尊敬していたらしく、サリエーリのウィーン宮廷勤続50年を祝う会では〈サリエー氏の50年祝賀によせて〉(重唱・アリア・カノン)D407を作曲し、また1821年には〈Der Fischer〉D225、〈Der König in Thule〉D367、〈Erster Verlust〉D226、〈Nähe des Geliebten〉D162、〈Rastlose Liebe〉D138と、いずれもゲーテの詩に作曲した初期の名作歌曲を献上している。





## ウィーンの劇場

ウィーンには音楽の劇場として、市内にケルトナートーア劇場とブルク劇場の二つの宮廷劇場が、そして郊外にアン・デア・ウィーン劇場があり、それぞれ特徴をそなえたオペラ・レパートリーが上演された。社会が落ち着いて、音楽が市民の娯楽として定着するにつれ、郊外のアウガルテン公園の音楽会場も社交場になっていった。

### イタリア・オペラの歌劇場としての「ケルトナートーア劇場」

市内ケルンテン門そばの劇場。1709年にイタリアの喜劇一座によりこけら落としされた。1794年以後、バレエとイタリア・オペラだけの上演時期があったが、やがてドイツ語作品も加わるようになる。シューベルトのオペラのうち(双子の兄弟)がこの劇場で5回上演され、好評を博した。

### 伝統と格式の「宮廷ブルク劇場」

モロ作彩色版画。1741年に開設したブルク劇場では、1783年からレーポルト2世の死(1790年)までイタリア・オペラが上演され、イタリア音楽の拠点だった。一時、ドイツ語のジグシュピールが奨励されるが(1778-83年)、以後再びオペラ劇場として重要な役割を担った。1821年以降、宮廷ブルク劇場とよばれる。シューベルトのオペラはここでは上演されていない。

### 郊外の劇場「アンデア・ウィーン劇場」

前身は(魔笛)が初演されたフライハウス劇場(免税劇場)。1802年にウィーン川をはさんで移転・改築され、私設ではあるが帝国劇場となった。ドイツ語ジグシュピールやイタリア語のスペクタクル・オペラのほか演奏会もさかんに行われた。シューベルトの(魔法の豎琴)(フィエラブラス)(ロザムンデ)が上演された。

### 1820年頃「アウガルテン朝のコンサート」

郊外のアウガルテンではモーツァルト時代から小さなコンサートが頻繁に開かれていた。1820年頃になると朝のコンサートをお目当てに、ファッションナブルな服装の人々が集ったようだ。戦争が終わった時代に、市民のエネルギーは日常の楽しみで発散された。展示の絵からは華やいだざわめきがきこえるようだ。

## シューベルトの歌曲を広めた歌手たち

### ミヒャエル・フォーグル(1768-1840)

クーペルヴィーザーの画をもとにしたユリウス・ファルゲルの油彩画。バリトン歌手。1794年から28年間、宮廷歌劇場で歌い、イタリアものとドイツもの両方とも卓抜していた。シューベルトの歌曲に共感し、おそらくイタリア・ベルカントの歌唱様式で歌ったと思われる。

る。フォーグルは当時「最も偉大な朗誦歌手の一人」と評価されていたが(総合音楽新聞 1821年)、かなり装飾をつけて歌ったことがわかっている。そうしたフォーグルの装飾スタイルは、シューベルトはもとより当時の人々からうけいれられており、当時の歌曲の様式が今日とは違っていたことを認識させる。その演奏はシューベルトの作曲に影響を及ぼしたと思われるから、フォーグルの歌唱スタイルは今後、あらためて研究されなくてはならないだろう。シューベルトは「コンヴィクト」時代にシュパウンに連れられて観たグルックのオペラでフォーグルを聴き、強い印象をうけていたが、やがて卒業後 1817年にショーバー一家で彼と出会う。(ショーバーは妹の夫でイタリア人歌手シボニー Siboni を通してフォーグルを知っていたようだ。)シューベルトは 1819年にフォーグルの誕生日にカンタータ D666 を作曲。以後も数々の歌曲を献上している。

### フォーグルとシューベルト

二人の共通の友人であるショーバーが描いた鉛筆のスケッチ。宮廷歌手だったフォーグルの誇り高い様子がよくあらわされている。

### 散歩するフォーグル、シューベルト、ショーバー

モーリッツ・フォン・シュヴィントによる版画。市内から郊外にぬける門の前を散歩するシューベルトと仲間。フォーグルとは気があったのか、フォーグルの故郷と一緒に旅行している。

### アンナ・ミルダー=ハウプトマン(1785-1838)

ベーガー作水彩画。楽長サリエーリのイタリア歌唱の薫陶をうけたソプラノ歌手。ベートーヴェンの〈レオノーレ〉(1805)、〈フィデリオ〉(1814年)で見事な歌唱技巧を披露した。シューベルトはグルックの〈タウリスのイフィゲニー〉でフォーグルとミルダー=ハウプトマンを聴いて感動し、彼女に〈ズライカ〉を献上。ミルダー=ハウプトマンもシューベルトの歌曲に共鳴し、ベルリンのコンサートで〈ます〉D550、〈魔王〉D328などを歌って、シューベルトの歌曲を広めた。

### カール・シェーンシュタイン男爵(1797-1876)

ケーペルヴィーザー作のリトグラフ 1841年。アマチュアのテノール・バリトン歌手。本職は宮廷官吏。熱烈なイタリア音楽ファンだったが、シューベルトと出会ってからドイツ歌曲にも親しむ。フォーグルを模範にしたその歌唱は気品があったと伝えられ、シューベルトは彼の声域を念頭に多くの歌曲を作曲したといわれる。〈美しい水車小屋の娘〉D795ほかを献上。

### ルートヴィヒ・ティツェ(1797-1850)

デッカー作 1825年頃のリトグラフ。非常に美しい声のテノール歌手であったという。〈憩いなき愛〉D138など数多くの歌曲を初演した。1825年頃にシューベルトはオフフェルトリウム D136を献上したが、これは華麗で高度なイタリア・ベルカント歌唱を要求する教会音楽で、ティツェもまたベルカント歌唱に通じていたことがわかる。

## シューベルトのイタリア音楽の学習とこの時期の作品

### サリエーリに習っていた頃の学習

声楽曲 アリア、二重唱、三重唱、四重唱、合唱、テノールのアリア

シューベルトは少なくとも 1812 年から 1816 年まで、市内にあるサリエーリの自宅に隔週、作曲レッスンに通っていた(自宅は Göttweihergasse 1/Seilergasse)。ベートーヴェンは、ハイドンらに対位法をはじめ器楽の作曲法を学んでのちに、サリエーリのもとを訪れたから、レッスンは、もっぱらイタリア語の声楽曲の作曲法に徹したものだ。しかしシューベルトの学習はこれとは異なり、徹底して初歩から行われ、伝統的なフーガから始まった。とはいえ、やはり主力はイタリア語の声楽曲だった。一部の楽譜には、サリエーリの添削のあとがそのまま残されていて、レッスンのようすが明らかである。

サリエーリの作曲レッスンは、どの生徒に対しても同じ方法だった。桂冠詩人メタスタージョの詩に基づき、同じ歌詞を用いていくつもの声部で作曲させ、まず声部書法を学ばせる。例えば(無邪気な息子; Quell innocente figlio) D17(15 歳)では2声から4声まで9つの稿を作曲させ、またソプラノ用のアリア(不幸せな子よ Misero pargoletto) D42(16 歳)でも3つの稿を作曲させて、イタリア語にふさわしい旋律を指導している。アリア(捨てられたディドネ Didone abbandonata) D510もこの延長線にある。ところでこれらの作曲の要点は、メリスマをどのようにつけるかであった。伸ばす音符の動き方を、サリエーリは丁寧に指導している。こうしてシューベルトは、カンタービレな旋律法を学ぶのだが、やがて同様のことを、シラーの詩によるドイツ語歌曲に応用していく。(無邪気な息子) D17 の独唱稿は面白い例を示している。この曲にはサリエーリの添削も残されているのだが、じつは同じ 1812 年にドイツ歌曲(小川のそばの若者) D30(シラーの詩)も作曲していて、これら2曲を比べてみると旋律も和声もそっくりなのだ。シューベルトはイタリア語で練習をしながら、同じ音楽をドイツ歌曲にあてはめてみたのであろう。ともあれ、シューベルトは熱心に学習し、いくつかの自筆譜には「サリエーリの弟子」と記すほどであった。この表記を、純粹に尊敬の表現とみるか、宮廷楽長の弟子であることを誇らしく明示しようとしたのか、このあたりは見方が分かれるところである。

### ジョアッキーノ・ロッシーニ(1792-1868)

1816 年、ウィーンではじめてロッシーニのオペラが上演されて以来、その軽快でエネルギッシュな音楽は人々を魅了した。やがて 1822 年に、ロッシーニと懇意だった興業主バルバイヤがケルトナートーア劇場で「ロッシーニ・フェスティバル」を開催するにおよんで、ウィーンにはロッシーニ旋風がふきあれる。シューベルトも 1816 年以來、その音楽に刺激を受けていたが、「フェスティバル」後は一層興味を示し、本格的なオペラ(アルフォンソとエストレッラ)では、ロッシーニ的なイタリアオペラの影響を映し出している。

## 作品

### 初期のオペラ(悪魔の快樂荘) D84

多くの作曲家同様、シューベルトもオペラに強い意欲を示していた。断片を含めて 19 もの作品を残し、そのうち 4 つの作品は、宮廷劇場とアンデア・ウィーン劇場で上演されて好評を博した。ただしすべてドイツ語の作品である。(悪魔の快樂荘)はコツェプーの台本によるもので、第 1 稿が 1813 年、第 2 稿が 1814 年。すなわち、交響曲第 1 番、ミサ曲第 1 番と同じ時期に作曲されている。ジングシュピールだが、明るくなめらかな旋律はイタリア語の歌唱様式でかかれているといっていよう。

シューベルト新全集<A9 - 588>XXII ページ

### (糸をつむぐグレートヒェン) D118

1814 年 10 月 19 日作曲。感情をあふれさせた劇的な歌唱声部と、糸車をあらわすピアノ伴奏の表現は、それまでのドイツ語歌曲の枠組みを大きく超えたものであった。この歌曲をもって近代ドイツ歌曲が誕生したといわれる。これもサリエーリに師事している時期の作品である。

シューベルト新全集<A1 - 834>

### (交響曲第 3 番 二長調) D200

1815 年 5 月から 7 月にかけて作曲。ロッシーニのオペラはまだウィーンでは上演されていないが、現代的なイタリア音楽は広まっていたのかもしれない。この作品の第 4 楽章は、あたかもロッシーニのオペラ・ブッファを思わせる生きのよさと、キレとがあふれている。その弾力は第 6 交響曲へ、そしてさらには第 8 交響曲(大八長調)へと発展していく。

シューベルト新全集 A1 - 841

### 宗教曲(オッフエルトリウム) D136

1815 年作曲。ソプラノ(またはテノール)独唱に、クラリネット独奏が協奏風に加わる。シューベルトの声楽曲のうちでも最もイタリア的なもののうちのひとつで、華麗なメリスマに彩られている。サリエーリのミサ曲においても、独奏と独唱のコンチェルトな楽章がみられるから、おそらくそうした書法を模範にしたものである。コロラトゥーラの旋律は、若いシューベルトならではの美しさである。

シューベルト旧全集<A1 - 804>

### (スターバト・マーテル) D383

1816 年作曲。第 4 曲<二重唱>。宗教曲はシューベルトにとって重要なジャンルだが、とりわけ聖母マリアを歌った作品は深い叙情性をたたえている。美しいメリスマ装飾や 1 音を長く伸ばす歌唱の旋律線は、イタリア・ベルカントの伝統をふまえたもの。若いシューベルトの音楽はそこから多くの栄養をえている。

シューベルト新全集<A11 - 407>XXI ページ

### 〈ます〉 D550

5稿のうち第1稿と第2稿は1816 - 17年作曲。若いシューベルトの歌曲の魅力は、何といってもドラマティックな朗誦となめらかなメリスマ装飾にある。各旋律の末尾を飾るなめらかな動きから、〈ます〉の晴れやかさは生まれている。

シューベルト新全集<A1 - 837>

### 〈イタリア風序曲〉二長調 D590

1817年作曲。ロッシーニのオペラが1816年にケルトナートーア劇場で上演されるや、ウィーン中がその魅力にひきこまれた。シューベルトものちにロッシーニの〈セビリヤの理髪師〉を賞賛している。この序曲はロッシーニの音楽に、率直に反応した結果、生れたものである。別の序曲八長調 D.591 とペアで作曲された。“イタリア風 im italienischen Stile(正確にはイタリア様式で)”というタイトルは、じつはシューベルト自身ではなく、友人たちの間でこう呼ばれていたもの。シューベルト没後、兄フェルディナントが弟の作品目録に記載する際に、この名称を書き込んだとされる。名前の由来はともかく、音楽はロッシーニの様式を思わせる。シューベルトはカンタービレの旋律や、強弱法を存分に駆使した力動感など、ロッシーニの手法を快活にとりこみながら、“イタリア風”をやったのけている。モダンなイタリア音楽を好んだ当時の風潮に合致したのであろう、シューベルトの器楽曲として、はじめて公開演奏された。この曲はシューベルト自身も気に入ったとみえて、〈魔法の竖琴〉序曲 D644(ロザムンデ序曲として有名)の2箇に、少し形をかえて転用している。

シューベルト旧全集<A1 - 794>

### 〈声楽練習曲〉 D619

シューベルトの声楽曲はどんな歌唱法で歌われていたのだろうか。最近の研究によれば、19世紀はじめのウィーンでは、あらゆる声楽曲のメソッドとしてイタリア・ベルカント歌唱が一般的だった。つまり訓練を受けた歌手は楽譜にない装飾音のつけ方、メッサ・ディ・ヴォーチェ ヴィブラートといった伝統的な唱法に精通していた。シューベルト歌手といわれたM. フォーグルも、このメソッドにそって即興的に装飾音を付加して歌ったのである。こうした歌唱法に関して手がかりを与えてくれるのが、シューベルトが作曲した〈歌唱練習 Singübungen〉D619である。この練習曲は1818年、家庭教師をしていたエステルハーゼ家のカロリーネとマリーのために書かれたもので、歌詞なしの2声部と数字付き低音で記されている。実際には下声部はシューベルト自身が歌ったようだ。この曲でシューベルトが模範にしたのは、伝統的なフックスの教本、そしてそれ以前のイタリア歌唱練習曲だった。

シューベルト新全集<C52 - 899>

### イタリア語の歌曲〈4つのカンツォネッタ〉 D688

1820年作曲。最初の2曲はヴィットレリ、あとの2曲はメタスタージョの詩。シュパウンの後ぞえになったフランツィスカ・ローナーのために作曲したとみられ、イタリア語の歌曲が愛好されていたことがわかる。

シューベルト新全集<A11 - 413>

## 国立音楽大学附属図書館所蔵

### 19世紀に出版されたシューベルトの印刷楽譜

1814年作曲 17歳(エンマに) D113 1815年作曲 18歳(ヘクトルの別れ) D312  
(乙女の嘆き) D191 ウィーン ディアベツリ社 [1832] <MF6535>

1815年作曲 18歳  
(人質) D246 ウィーン ディアベツリ社 [1830] <MF4425>

1817年作曲 20歳  
(ピアノ・ソナタ(第7番)変ホ長調) D568 ウィーン ディアベツリ社 [1835] <MF3569>

1819年作曲 22歳  
(夕べの情景) D650 ウィーン ディアベツリ社 [1831] <MF4425>

1822または1823年作曲 25または26歳  
(湖畔にて) D746 ウィーン ディアベツリ社 [1831] <MF4425>

1823年作曲 26歳  
(怒れる吟遊詩人) D785 ウィーン ディアベツリ社 [1831] <MF4425>

1826年作曲 29歳  
(2つの性格的な行進曲) D886 ウィーン ディアベツリ社 [1829] <MF652>

1826年 作曲 29歳  
(ピアノ・ソナタ(第18番)ト長調) D894 ウィーン ハスリンガー社 [1830] <MF652>

1826?年作曲 29歳?  
(獅子王リチャードの物語) D907 ウィーン ディアベツリ社 <MF4425>

1828年作曲 31歳  
(幻想曲 へ短調) D940 ウィーン ディアベツリ社 [1829] <MF3416>

## 参考文献

### 新発見のポートレート

Rita Steblin; Ein unbekanntes frühes Schubert-Porträt? Tutzing 1992 <J77-366>

Elmar Worgull; Kunsthistorische Untersuchungsmethoden als ein interdisziplinärer Aspekt in der Schubert-Ikonographie. in: Schubert und seine Freunde. Hrsg. von Eva Badura-Skoda, Gernold W. Gruber, Walburga Litschauer, Carmen Ottner. Wien 1999 <J91-686>

### コンヴィクトの生活

Eva Badura-Skoda; Schuberts Konviktszeit, seine Schulfreunde und Schulbekanntschaften

(Anhang:Matrikel Listen des Akademischen Gymnasium von 1808-1813). in; Schubert und seine Freunde. Hrsg.von Eva Badura-Skoda , Gernold W.Gruber , Walburga Litschuer , Carmen Ottner.Wien 1999 <J91-686>

### 若い時期の学習(サリエーリのレッスン)

Alfred Orel;Der junge Schubert.Mit ungedruckten Kompositionen Schuberts nach Texten von Pietro Metastasio. Wien [1940] <C5-039>

### シューベルト事典

Schubert Lexikon;Hrsg.von E.Hilmar und M.Jestremski .Graz 1997 (シューベルト事典) <X044/S384>

Schubert Handbuch;Hrsg.von W.Dürr und A.Krause.Kassel 1997 (シューベルト・ハンドブック) <J85-653>

### シューベルト資料集

Franz Schubert Dokumente 1817-1830 Erster Band.Texte. Hrsg.von E.Hilmar. Tutzing 1997<J77-225>

Franz Schubert Dokumente 1801-1830 Erster Band.Addenda und Kommentar. Hrsg.von E.Hilmar.Tutzing 2003<J100-069>

### 近年のシューベルト定期刊行物

Schubert Durch die Brille. Wien 1989年 ~ (「メガネを通して」:定期刊行物)<P5241>

Schubert-Jahrbuch . Duisburg 1996 ~ (「シューベルト年報」定期刊行物)<P5280>

### そのほかの最近のシューベルト文献

Der vergessene Schubert. Franz Schubert auf der Bühne.Katalog zur Ausstellung.Hrsg.von Partsch u.Pausch.Österreichisches Theater Museum. Wien 1997.(劇音楽)<J87-011>

Schubert s Vienna;ed.by Raymond Erickson. Yale University 1997 (シューベルトのウィーン) <J86-109>

Br.Newbould;Schubert. The Music and the Man. California 1997 (伝記)<J85-568>

Rita Steblin;Schubert durch das "Kaleidoskop". Österreichische Musikzeitschrift 1997 , 1-2(52 Jg) <P207>(新発見の「ナッセンス協会」.以下2点の文献も)

Rita Steblin;Schubert s Role in the "Unsinnigesellschaft" als Revealed by Clues from Schiller und Perinet s "Aschenshlägel".in:Schubert und seine Freunde.Hrsg.von E.Badura-Skoda und Gruber , Litschauer Ottner. Wien 1999 <J91-686>

Rita.Steblin;Die Unsinnigesellschaft , Schubert , Kupelwieser und ihr Freundeskreis. Wien 1998<J91-049>

### シューベルト関連の図版

Ernst Hilmar;Schubert. Graz 1989<C48-843>

「ベートーヴェン全集」 第5巻 講談社 1998 <C63-339>

「サントリー音楽文化展 84 シューベルト」 サントリー 1984 <C40-447>

### 日本語によるシューベルト文献(主に1997年以降から抜粋)

エーリヒ・ドイッチュ編 「シューベルト 友人たちの回想」 石井不二雄訳 白水社 1978 <C27-874>

喜多尾道冬「シューベルト」 朝日新聞社 1997<C62-203>

石井誠士「シューベルト. 痛みと愛」 春秋社 1997 <C62-041>

エーリヒ・ドイッチュ編「シューベルトの手紙」 実吉晴夫訳・注解 (国際シューベルト協会刊行シリーズ) メタモル出版 1997<C61-883>

エルンスト・ヒルマー「シューベルト」 山地良造訳 音楽之友社 2000<C64-500>

村田千尋「シューベルト」 音楽之友社 2004<J101-477>

シューベルト 参考年譜 (藤本一子編)

1797		1月31日フランツ・シューベルト誕生(現ウィーン9区) 第12子	ハイドン(皇帝賛歌)
1798	1		ナポレオン,オーストリアに侵攻
1799	2		
1801	4	生徒が増えたためゾイレンガッセに転居	(新)アン・デア・ウィーン劇場開場
1802	5		「コンヴィクト」新設
1803	6	父の学校に入学	
1804	7	ホルツァーにヴィオラ,オルガン,通奏低音などを習い,聖歌隊で歌う	ナポレオン皇帝即位
		すでに宮廷楽長サリエリに紹介されていたともいわれる	オーストリア皇帝フランツ2世
1805	8	父,兄からヴァイオリンとピアノを学ぶ	(エロイカ)交響曲初演
			ナポレオンがウィーンを占拠
1806	9	宮廷礼拝堂歌手の試験をうけてサリエリから合格点をもらう	
1807	10		
1808	11	再度,宮廷楽団に応募し,ソプラノ歌手として採用され,同時に市立ギムナジウムに寄宿生となる	(運命)(田園)初演
			ツェルター「リーダーターフェル」創設
			ウィーンに娯楽場(アポロザール)開設
1809	12		ハイドン没
			ナポレオンがウィーンに再入城。
			メッテルニヒ外相
1810	13	現存する最初の作品(幻想曲)(連弾)この時期に作曲。	ショパン/シューマン生
			ナポレオンがオーストリア皇女と再婚
1811	14		リスト生
		弦楽四重奏曲D18,最初の歌劇(鏡の騎士)	ゲーテ「詩と真実」
		交響曲の最初の試み。歌曲(葬列の幻想)(断片)(ハガルの嘆き)(乙女の嘆き)(父親殺し)	
1812	15	母死去	ウィーン楽友協会設立
		サリエリに対位法を学び始める(1816年まで)	ナポレオンのロシア遠征
		変声により聖歌隊を退く	ゲーテ「詩と真実」
1813	16	父が再婚(シューベルトの14歳上の女性)	ベートーヴェン(ウェリントンの勝利)
		メーアフェルト財団奨学生に選ばれるがうけず。	ベートーヴェン(第7交響曲)
		ギムナジウムを卒業。コンヴィクトを出てアンナ師範学校に通う	ヴァーグナー,ヴェルディ生
		交響曲第1番,歌劇(悪魔の快楽荘)	対フランスの「解放戦争」始まる
		(墓堀り人の歌)(管楽8重奏)シラーのパラード数多く作曲	
1814	17	師範学校の教職修了,父の学校の補助教師になる	(フィデリオ)第3稿上演
		ミサ曲第1番(リヒテンタール教会100年記念祭)	ナポレオン退位,エルバ島へ
		数多くのゲーテ歌曲	ウィーン会議始まる(9月18日~)
		数多くのマティッソン歌曲,10月19日(糸を紡ぐグレートヒェン)	リュッケルト「ドイツ詩」
1815	18	テレゼ・グロープに恋を告白	メルツェルのメトロノーム特許
		歌曲の年(145曲)	ウィーン楽友協会第1回定期演奏会
		交響曲第2番,第3番,ミサ曲第2番,(魔王)などゲーテ歌曲	ナポレオンがエルバ島脱出
		歌劇(クラウディーネ・フォン・ヴィラ・ベッラ)(オッフェルトリウム八長調)	100日天下ののちセントヘレナ島流刑
			ウィーン会議終結(6月9日)
			キリスト教ヨーロッパ統一のための「神聖同盟」締結



## シューベルト 参考年譜

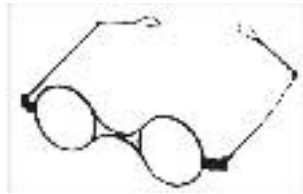
1816	19	父の家を出る。	ロッセーニ(タンクレーディ)ほかウィーンで上演
		ライバッハ(リュブリャーナ)の音楽教員に応募(不採用)	
		豎琴弾きの歌曲	
		ゲーテに歌曲を送るが応答なく、のちに返送される	
		ヴァイオリンソナタ,交響曲第4番,第5番,(さすらい人)	
1817	20	フォークルと知り合う	楽友協会歌唱学校(音楽院)
		ピアノ・ソナタの年	メッテルニヒ検閲強化
		(死と乙女)(ます)(音楽によせて)(2つのイタリア風序曲)	'ウィーン総合音楽新聞'創刊
			'ナンセンス協会Unsinnsgesellschaft'に通う
1818	21	父の転任にともない一家は郊外のロスアウ地区に転居。父を補佐	ウィーン初の劇場舞踏会(アン・デア・ウィーン劇場)
		夏と秋はジェリツに滞在:エステルハージ家の音楽教師	'ルートラムスヘーレLudlamschoele'(会員106名)活発
		はじめて作品が印刷される(エルラフ湖)(雑誌付録)	蒸気汽船ドナウ川で試運転
		イタリア風序曲がローマ皇帝館で初演。ウィーン音楽界に名が出る	バイロン'チャイルド・ハロルドの遍歴'
		シェンシュタイン男爵(ハイパリトン)と知り合う。	
		マイアーホーファーと2年にわたる同居	
		交響曲第6番	
1819	22	シュヴィントと交友始まる	ザントがコツェブーを暗殺
		マイアーホーファー歌曲,ゲーテ歌曲	すべての学生集会禁止
		(羊飼いの嘆きの歌)公開演奏	王宮前バスタイに一流コーヒ店閉店
		フォークルと上オーストリアに旅行	ゲーテ'西東詩集'
1820	23	友人ゼン危険分子として投獄	ウィーン初の女性気球乗り
		歌劇(双子の兄弟)(魔法の豎琴)上演	
		テレゼ・グローブ結婚	
		歌曲作曲家として声望たかまる	
		(ラザロ)(シャクンタラ)(四重奏断章)(いずれも未完)	
1821	24	ケルトナートーアのコンサートで歌曲3篇がとりあげられる	ウィーン音楽院設立
		(魔王)Op.1出版売れ行き上々	ナポレオン没
		夏はアッツェンブルック,ザントベルテン,9月はオクセンブルク	メッテルニヒ,宰相に任命
		記録上はじめての「シューベルトティアード」	ギリシャ独立戦争始まる
		楽友協会演奏会に登場	ミュラー'旅をするホルン吹き'の遺稿
1822	25	ヴェーバーと会う(魔弾の射手上演に際して)	ヨーゼフシュタット劇場新装
		(梅毒に感染・発病?)	ケルトナートーア劇場'ロッセーニ・フェスティバル'
		アッツェンブルックで「シューベルトティアード」	ベートーヴェン・ピアノソナタ第32番
		ウィーン楽友協会会員	バイエルン,ルートヴィヒ1世即位
		ミサ曲第5番(稿)	新任のウィーン大司教保守教会政策を促進
		寓話'僕の夢',(未成交響曲)(さすらい人幻想曲)	
		歌曲(こびと),歌劇(アルフォンソとエストレラ)	
1823	26	シュタイアマルク音楽協会名誉会員	(オリアンテ)ウィーン初演
		5-7月ウィーン総合病院に入院	ヴェーバー没
		シュタイヤー,リンツ旅行	フォルクスガルテンに演奏会場をもつ
		ヴェーバーと諍い(アルフォンソ...)ベルリン上演計画中止	カフェーハウスが建てられ,市民の憩いの場となる
		(美しい水車小屋の娘),劇音楽(ロザムンデ),歌劇(フィエラプラス)	
		ピアノ五重奏曲(ます)	

## シューベルト 参考年譜

1824	27	夏と秋はハンガリーのジェリツで。(グランデュオ) (はすらい人の夜の歌 ), (アルペジョーネ・ソナタ) 弦楽四重奏 (ロザムンデ) (死と乙女) シュパンツィク四重奏団 (ロザムンデ) 演奏	ベートーヴェン (第9) (ミサソレムニス) 初演 ランナー楽団設立 ブルックナー生 ミュラー「旅をするホルン吹き」の遺稿
1825	28	オーストリア中部旅行。グムデン・ガスタイン交響曲作曲 「シューベルティアーデ」盛ん(宮廷書記官邸宅など) 人気が高まり肖像画が売りに出される。 ウィーン楽友協会補欠理事に推挙 ベルリンでアンナ・ミルダーが(魔王) (ズライカ) 演奏 ゲーテに献呈の歌曲を送るが返信なし。 (若き尼修道女) ピアノソナタイ長調, イ短調, 二長調	サリエーリ没 ヨーハン・シュトラウス(父) 楽団設立
1826	29	ピアノソナタイ短調 D845 出版。長文の批評により賞賛 シュパウン家で大規模な「シューベルティアーデ」 父シューベルトがウィーン市民権を取得 宮廷副楽長に応募するが叶わず ウィーン楽友協会に交響曲提出(グムデン・ガスタイン = 大八長調) 弦楽四重奏 (死と乙女) 演奏 (春に) (幻想ソナタ) ヴィルヘルム・マイスターからミニョン歌曲	「ルートラムスヘーレ」解散命令 ヴェーバー没 ハイネ「旅の絵」, ザイトル「詩集」
1827	30	2月から(冬の旅) 部。病床のベートーヴェンを見舞う 高い水準で「シューベルティアーデ」開催 ディアベリ社, ハスリングガーから作品出版 秋にグラーツ滞在後, (冬の旅)。(幻想ソナタ) 賞賛される ウィーン楽友協会理事推挙 シュパンツィクラが(8重奏曲) 演奏 ベートーヴェンの葬列で松明持ち (即興曲) (ドイツ・ミサ)	ベートーヴェン没
1828	31	(冬の旅) 部出版。(大八長調) 完成。 作品の出版依頼が相次ぐ 自作演奏会を催すが批評にとりあげられず。 おそらくショーバーの朗読会でハイネの詩を知る レルシュタープとハイネの詩による歌曲。ミサ曲第6番, 弦楽五重奏曲 最後の三つのピアノソナタ, (岩の上の羊飼ひ) (鳩の使い) 腸チフスの病床で(冬の旅) 部校正。友人たちが Be の Op. 131 を演奏 死去。ヴェーリング墓地に埋葬。1ヶ月後追悼式典	バガニーニ旋風 ベーゼンドルファー製造開始
1829		(白鳥の歌) 出版	
1830		作品全集刊行予告	フランス7月革命



図書館展示 6月●2004  
FRANZ SCHUBERT



若いシューベルトのイタリアン